

セルリー一疫病対策マニュアル



<マニュアルの使い方>

- ① まずは本編全文をご一読ください。
- ② 育苗ほ、本ほでの対策方法一覧が目次になっています。
具体的な対策を知りたい項目のページを参照してください。
- ③ 参考情報は【付録】としてまとめています。
本編から関連する参考情報をご覧いただいても、【付録】のみをご一読いただいても結構です。

【目次】

1	はじめに	1
(1)	セルリー疫病の発見	
(2)	セルリー疫病菌の生態および症状	
2	ほ場準備・管理のポイント（育苗ほ、本ほ共通）	2
(1)	土壌消毒の基本	
	□残渣の除去・十分な腐熟	
	□適正な土壌水分での処理	
	□消毒期間の確保	
(2)	作付け前のほ場選定・管理	
	□セルリー疫病発生履歴のないほ場に作付け	
	□排水性の改善	
	□敷きわらや緑肥等による土壌流亡対策	
(3)	栽培管理のポイント	
	□発病株の早期抜き取り・ほ場外への持出し等による処分	
	□かん水に清潔な水（水道水・井戸水）を使用する	
	□別ほ場に入る前にロータリーや靴底等に付いた土壌を落とす	
3	育苗期の防除	4
(1)	育苗期に感染させない！	
(2)	病原菌を持ち込まないための対策	
	□セルトレイ・ポット等の新品使用または適正な洗浄消毒	
	□病原菌の持ち込み防止（靴の履き替え、靴底の消毒）	
	□雨水、用水路の水の流入防止	
(3)	病原菌を増やさないための対策	
	□育苗ポット等を直接地面に置かない	
4	本ほ定植時以降の防除	6
(1)	定植時のユニフォーム粒剤処理	
	□ユニフォーム粒剤の株元散布	
(2)	芽かき後の薬剤散布	
	□芽かき作業前後の薬剤散布	

1 はじめに

(1) セルリー疫病の発見

令和3年6月、諏訪地域の水田転換畑等の排水不良ほ場で栽培しているセルリーで、道管の褐変、外葉の黄化、芯葉先端の腐敗等を生じ、深刻な場合は立枯れを生じる障害が発生した。県野菜花き試験場による原因究明の結果、*Phytophthora* 属菌によって引き起こされる病害であることが判明し、「セルリー疫病」と命名された。セルリー疫病の発生は国内初で、令和4年(2022年)2月には県病害虫防除所より特殊報が発出された。

(2) セルリー疫病の生態および症状

疫病菌は原生生物の卵菌の仲間である。土壤中や被害残渣中に残存する卵胞子や厚膜胞子が伝染源となり、特に卵胞子は耐久性が高く、土壤中で数年間生存可能である。

本菌は、7.5~30.0℃の温度条件で生育可能である。発病好適温度は25~30℃で、高温条件下では発病が増加する。また、本菌は過湿条件を好み、特に滞水する箇所で発生が多くなる。かん水や泥はね等によって胞子が拡散し、遊走子は水の中を泳いで移動する。

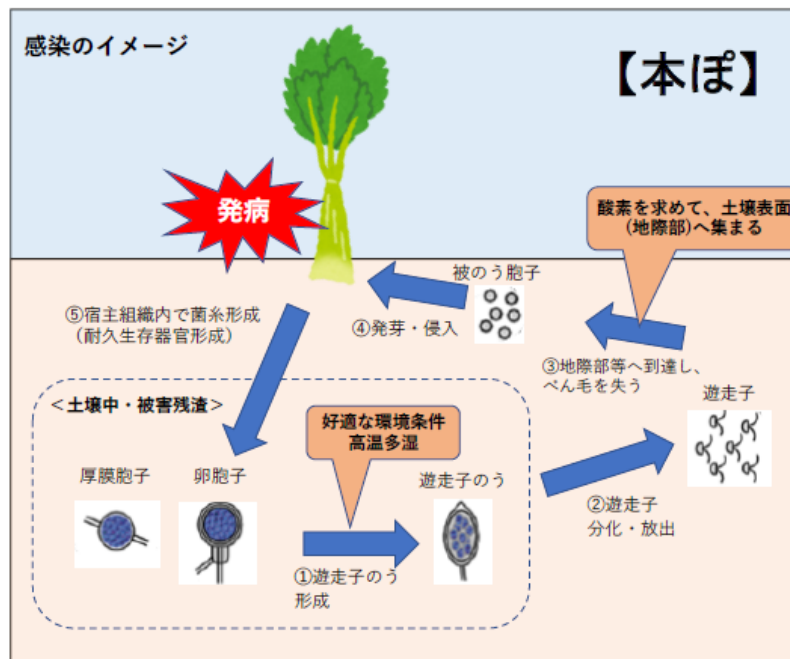


図1 セルリー疫病菌の生活環

セルリーが本菌に感染し発病すると、葉の黄化を伴う生育停滞や道管褐変、またカルシウム欠乏による根腐れ症状にも似た芯葉の腐敗等が見られ、症状が重篤な場合は枯死に至る。

疫病の診断方法として、市販されているイムノストリップキット (Agdia 社製) があり、数分で感染の有無を判別することができる。

なお、セルリー疫病はパセリにも感染するので注意が必要である。



発病した苗



発病初期は茎に水浸状の
褐変が見られる



重度の場合は葉の黄化、
芯の褐変・腐敗が見られる

図2 セルリー疫病の症状

2 ほ場準備・管理のポイント（育苗ほ、本ほ共通）

（1） 土壌消毒の基本

罹病残渣はなるべくほ場外へ持ち出し、その他の残渣は消毒前までに十分に腐熟させておく。土壌くん蒸剤はガス化して気相中を拡散していくため、消毒前に土塊を細かくし、適度（土を握って、かろうじて塊になる程度）に土壌水分を含ませておく。

管内の露地栽培の場合、マルチ畦内処理が一般的である。ハウス栽培などでほ場全面に処理する場合、薬剤注入後に厚さ 0.03 mm 以上のポリエチレンなどのシートやガス難透過性フィルムで被覆し、ガスが土壌にとどまるようにする。床土の消毒も同様に水分量や被覆を確認し、薬液が下層までしっかり行き渡るようにする。

標準的なくん蒸期間は平均地温 7～10℃で 20～30 日、10～15℃で 15～20 日、15～25℃で 10～15 日である。マルチ内にガスが残ると苗の根傷みによる生育不良などの薬害の原因になるので、計画的に土壌消毒を行っていく。

【注意】

- ・ 周囲への配慮：強い刺激臭があるため、住宅や畜舎が近い場合は事前に周知し、風の強い日を避ける。
- ・ 保護具の着用：医薬用外劇物に指定されているため、防護マスク、不浸透性手袋、保護メガネの着用が必須である。
- ・ 器具の洗浄：土壌くん蒸剤は金属を腐食させるため、使用後は灯油で入念に洗浄する。

(2) 作付け前のほ場選定・管理

なるべくセルリー疫病発生のないほ場に作付けを行う。滞水しにくいほ場にするため、サブソイラ等による耕盤層の破碎や、明きよをほ場外につなげる等の対策を行う。(詳細→【付録】3の(1)「湿害対策手引書」について) 土壌流亡対策として、敷きわらや緑肥のは種を行う。ほ場表面を流れる水の流末に、幅 50cm 以上の帯状となるように緑肥で土壌表面を被覆することで土壌の流出を低減することができる(図3)。

～イメージ図～

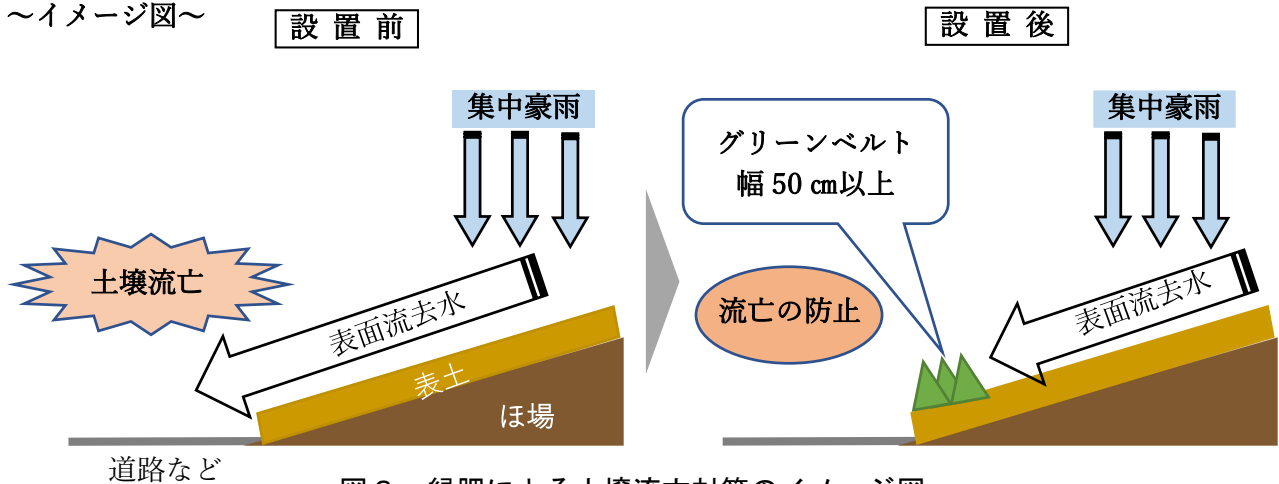


図3 緑肥による土壌流亡対策のイメージ図

【具体的な試験事例】

平成 24 年度普及に移す農業技術「全面マルチほ場における植生帯による土壌流出防止効果」(右の二次元コード参照)



<要旨>

全面マルチほ場の傾斜下に奥行き 50 cm 以上の植生帯(イネ科緑肥)を設置することにより、降雨により発生した表流水によるマルチ押さえ用土壌の流出を、植生帯を設置しない場合に比べて 0.2~5%程度に抑えることができる。

なお、令和 6 年度に諏訪地域における「てまいらず」(オオムギ)のは種時期を検討した結果、5月9日または5月20日には種すると6月11日には被覆率が100%となり、倒伏は6月中下旬、枯死は7月中下旬だった。(詳細→【付録】2の(3)緑肥「てまいらず」(オオムギ)の諏訪地域におけるは種時期の検討(令和6年度))

(3) 栽培管理のポイント

発病株を発見したら、すぐに発病株とその周辺株を抜き取り、ほ場外へ持ち出して適切に処分する。

かん水には水道水や井戸水等、汚染されていない清潔な水を用いる。発病が少ないほ場から順に管理作業を行うようにする。病原菌は土壌により拡散するため、別のほ場に入る際にはロータリーや靴底等についた土壌をよく落とす。

3 育苗期の防除

(1) 育苗期に感染させない！

令和5年度（2023年度）に諏訪地域で行われた調査では、育苗期にセルリー疫病が発生した苗を定植したほ場では、欠株や生育不良が増える傾向が確認された（図4）。すなわち、育苗段階でセルリー疫病を発生させないことが、本ほでの発生を抑えるための第一歩と言える。

育苗期には、本ほの症状と同様に葉の黄化や芯葉の腐敗等が見られるが、感染していても症状が現れない場合もある。陽性が疑われる苗はすぐにハウスの外へ持ち出し適切に処分する。

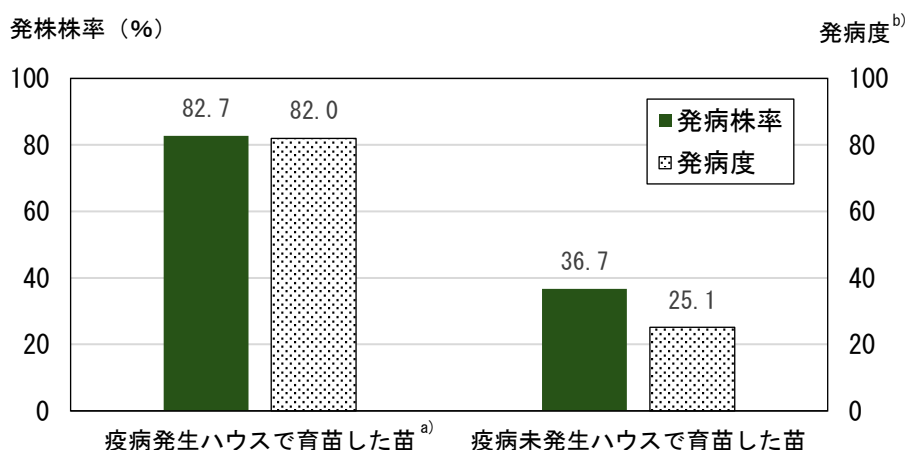


図4 セルリー疫病に対する薬剤の防除効果
(2023年 諏訪農業農村支援センター)

注) 表中の数値は5反復の平均値を示す。

a) 育苗ハウスでセルリー疫病が全体の10%（調査5,000株中、500株で発生）認められた。

試験には定植時に症状がみられない株を選定し、本ほに定植した。

b) 発病度 = $\sum (\text{程度別発病株数} \times \text{指数}) \times 100 / (\text{調査株数} \times 3)$

程度別発病指数 0：発病が認められない 1：芯葉及び切り口の褐変 2：芯葉及び切り口の褐変及び外葉の黄化 3：芯葉及び切り口の褐変及び株全体の黄化、枯死

【育苗期の管理】

- ・疫病発生ハウス：生産者が自家育苗しており、培土は山土を土壌くん蒸処理して使用。土壌消毒後の土は育苗ハウス内の苗床で管理。
- ・疫病未発生ハウス：JAの育苗施設で、培土は購入培土を使用。

【定植後の耕種概要】

- ・試験場所：諏訪地域現地ほ場（標高1,100m） 品種：「コーネル在来系統」 定植：6月13日
- ・区制・面積：1区8.0㎡ 30株/区 5反復
- ・栽培期間中の薬剤防除は、疫病以外の病害虫に対して、定期的に殺菌剤、殺虫剤を散布した。
- ・調査方法：8月23日に各区30株について、発病の有無を程度別に調査し、発病株率を求め、発病度より防除価を算出した。

(2) 病原菌を持ち込まないための対策

① 新品の資材を使用する、適切に消毒する

育苗ポットやトレー等の資材は新品を用いるか、再利用する場合は以下の方法で消毒する。なお、ポットやトレーが重なっていると消毒液が行きわたらないため、1個ずつにばらしてから浸漬させる。処理後は、薬害を防ぐために清水でよく洗い、しっかり乾燥させる。

表1 資材消毒に用いることができる消毒剤の例

用途	消毒剤	希釈倍率	処理方法
資材消毒 (ポット・トレー等)	ケミクロンG	500倍	瞬間浸漬
		1000倍	10分間浸漬
	イチバン	500倍	瞬間浸漬

具体的な処理方法や使用上の注意等はメーカーホームページをご覧ください。



『ケミクロンG』の
メーカーホームページ



『イチバン』の
メーカーホームページ

② 入室前に靴の履き替えを行う

ハウスの入口に下駄箱を設置し、入室前に必ず履き替える。または踏込消毒槽を設置し靴や長靴を消毒する。踏込消毒槽の消毒液は定期的に交換する。

③ 雨水が入らない環境整備

ハウス周囲の排水路の土砂を取り除いて勾配を確保し、雨水や用水路の水がハウス内に流れ込むのを防ぐ。

(3) 病原菌を増やさないための対策

① 感染苗は早めにハウス外へ出し、処分する

疫病の感染が疑われる苗は、すぐにハウスの外へ持ち出して処分する。放置すると病原菌が広がるため、早めの対応が重要である。

② 育苗ポット、トレーは地面に直接置かない

棚や台、パレット等を使い、育苗ポット、トレー等は地面から離して管理する。



図5 育苗トレーの管理方法の例

4 本播定植時以降の防除

(1) 定植時のユニフォーム粒剤処理

令和7年度、支援センターでは定植時のユニフォーム粒剤処理による防除効果を試験した。その結果、定植時のユニフォーム粒剤処理により、セルリー疫病の発生を処理30日後まで予防することができた。(詳細→【付録】2の(1)定植時のユニフォーム粒剤処理の効果・散布労力の比較検討(令和7年度))

J Aや生産者からの聴き取りでは、「6月下旬以降の収穫物でセルリー疫病の発生が認められた」との意見が出された。そのため、ユニフォーム粒剤の残効期間である定植30日後以降、疫病の発生が認められる場合は、新規に登録されたピシロックフロアブルを必要に応じて散布する。

表2 セルリー疫病に登録のある殺菌剤 (2026年2月1日現在 JPP-NET 確認)

農薬名	FRAC	希釈倍数 使用量	使用方法	散布液量	使用時期	使用回数
ユニフォーム粒剤	11+4	2g/株	株元 散布	—	定植時	1回
ピシロック フロアブル	U17	1000倍	散布	100~300L /10a	収穫前日まで	3回以内

(2) 芽かき後の薬剤散布

芽かきの傷は様々な病原菌の侵入口となるため、芽かき後になるべく早く殺菌剤を散布することが望ましい。高温多湿の条件下では、薬害が発生しやすいため、朝夕の涼しい時間帯に薬剤を散布する。また、有効成分の流亡や薬害を避けるため、降雨の直前・直後の薬剤散布を避ける等、散布のタイミングに注意する。

表3 セルリーまたは野菜類に登録のある殺菌剤例 (2026年2月1日現在 JPP-NET 確認)

農薬名	FRAC	適用病害	希釈倍数	使用時期	使用回数
アミスター20 フロアブル	11	斑点病	2000倍	収穫3日前 まで	4回 以内
カスミンボルドー	24+M1	軟腐病、斑点病	1000倍	収穫7日前 まで	3回 以内
Zボルドー	M1	黒腐病、黒斑細菌、軟腐病、 斑点細菌病、べと病	500倍	発病前~ 発病初期	—
コサイド3000	M1	褐斑細菌病、黒腐病、 軟腐病、斑点細菌病	2000倍	—	—
ダコニール アルファ	M5	斑点病、萎縮炭疽病	2000倍	収穫21日前 まで	2回 以内

※農薬を使用する際は、ラベルに記載されている適作物、希釈倍率、使用量、使用方法・時期・回数を必ず確認し、正しく使用すること。

【付録 目次】

- 1 諏訪地域のセルリー栽培を取り巻く環境の変化..... 1
 - (1) 生産量および生産者数の推移
 - (2) 近年の諏訪地域における気候の変化

- 2 支援センター実施試験の紹介 3
 - (1) 定植時のユニフォーム粒剤処理の効果・散布労力の比較検討
(令和7年度)
 - (2) 鉢上げ時または定植時の亜リン酸施用の効果（令和5年度）
 - (3) 諏訪地域における緑肥「てまいらず」（オオムギ）のは種時期の
検討（令和6年度）

- 3 参考情報..... 7
 - (1) 「湿害対策手引書」の紹介
 - (2) 萎縮炭疽病の生理・生態および対策方法
 - (3) 「H_s対策のための緑肥・輪作導入手引書」について
 - (4) セルリーかわら版 バックナンバー一覧

1 諏訪地域のセルリー栽培を取り巻く環境の変化

(1) 生産量および生産者数の推移

平成29年以降、生産者数は毎年4名程度減少しつづけ、同様に出荷量も減少傾向にあり、セルリー疫病の発生が諏訪地域のセルリー生産の減少に追い打ちをかけた状況である。

なお、生産者1名あたりの出荷量は増加していることから、生産規模の小さな農家から生産中止していると考えられた(図1、2)。令和7年度には生産者1名あたりの生産量が急増しており、農薬登録されたユニフォーム粒剤処理の効果が表れたものと思われる。

セルリー疫病発生以前の3か年(平成29年～令和元年)と発生確認後の3か年(令和4～6年)の、諏訪地域の出荷数量と県平均単価を図3に示す。セルリー疫病発生確認後は高温期、特に7月中旬～8月上旬、8月下旬の出荷数量が大きく減少しており、高温やセルリー疫病発生の影響によるものと考えられた。

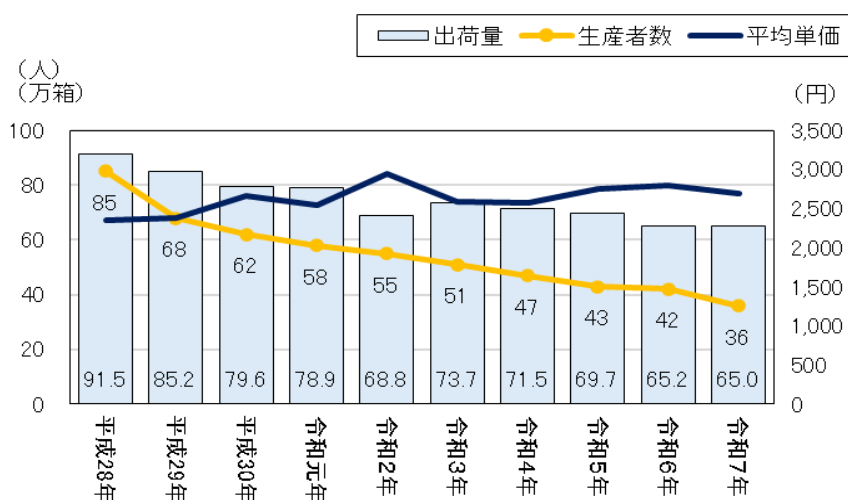


図1 JA 信州諏訪におけるセルリー出荷量、生産者数、平均単価の推移(JA 信州諏訪調べ)

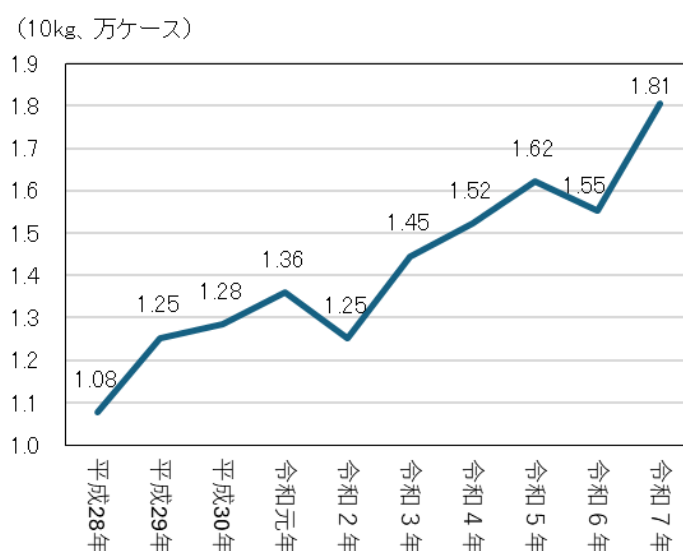


図2 JA 信州諏訪における生産者1名あたりの出荷量の変化(図1データを加工:出荷量÷生産者数により算出)

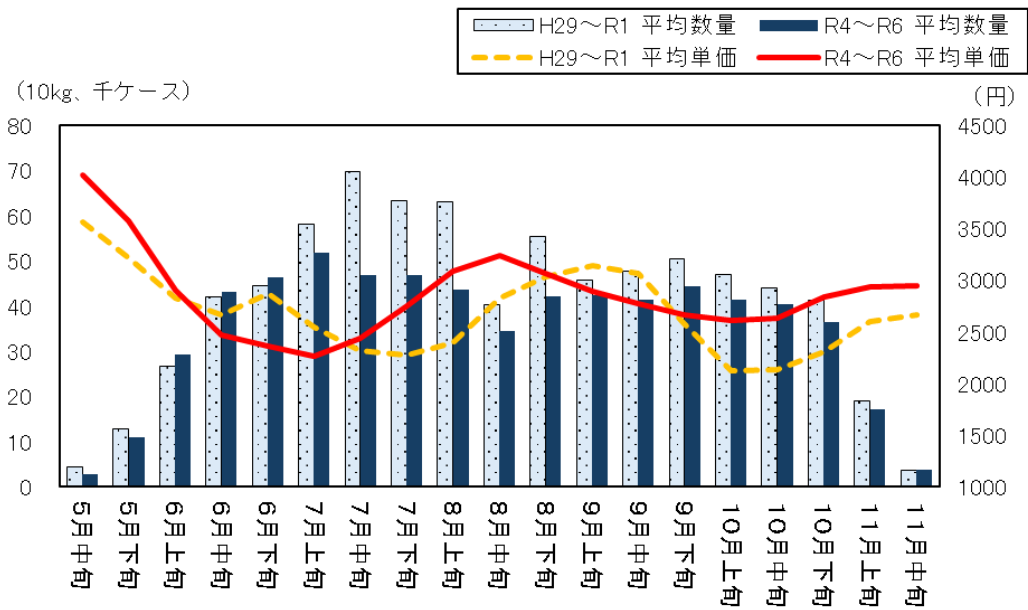


図3 諏訪地域の出荷数量および県平均単価の変化
 (「長野県野菜基本計画」により作図)

(2) 近年の諏訪地域における気候の変化

旬別日最高気温について、原村における直近5か年の平均値(2021~2025年)と、30年前の5か年の平均値(1991~1995年)の推移を図4に示す。直近5か年平均値においてセルリー疫病の発病好適温度(25~30℃)に該当するのは、6月下旬~9月中旬だった。

図4で各折れ線グラフが交わらないことから、30年前と比べて高温になったと言える。6月下旬~9月中旬の平均日最高気温は、直近5か年で27.7℃、30年前の5か年で24.4℃と、3.3℃高かった。

2024年の旬別降水量を見ると、平年値の倍以上の降水量となった旬があり、降水量が一時期に集中している様子が見える。9月中は降水量が非常に少なかった一方で、その前後に降水量が多かったことから、秋雨の時期が分散したと考えられた。

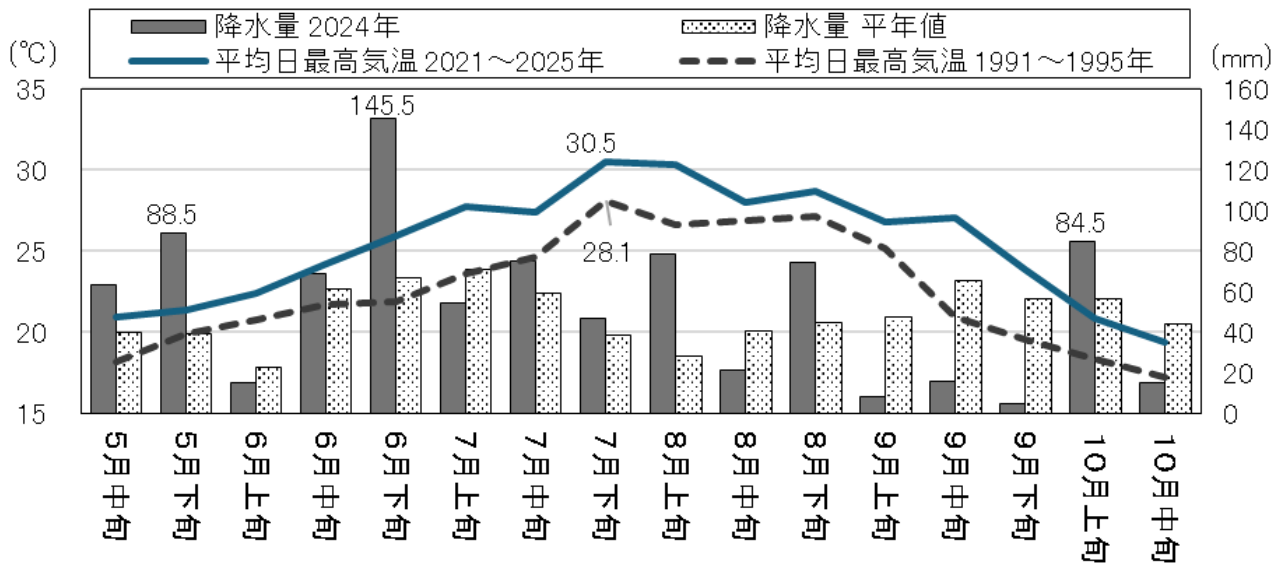


図4 日最高気温および降水量の推移(原村観測所)

2 支援センター実施試験の紹介

(1) 定植時のユニフォーム粒剤処理の効果・散布労力の比較検討

(令和7年度)

セルリー疫病に対しユニフォーム粒剤が令和6年10月に農薬登録拡大となり、産地では被害軽減への期待が大きい。本剤の効果および散布労力を確認するため調査を行った。

ア 定植時のユニフォーム粒剤処理の効果

① 調査方法

- ・調査場所 原村（標高1,050m）（前年、多発生したほ場で調査）
- ・耕種概要 5月26日定植（栽植密度50cm×38cm、2条植え）
- ・試験区

試験区	希釈倍数・使用量
ユニフォーム粒剤区（5月26日処理）	2g/株 株元散布
無処理区	—

- ・調査株数 各区、3地点で10株（計30株）を調査
- ・調査日 6月25日（処理30日後）

② 結果および考察

無処理区でも発病株数は2株のみと非常に少なかったが、ユニフォーム粒剤区では発病株が見られなかった。薬害は確認できなかった（表1）。JAや生産者からの聞き取りでは、「ユニフォーム粒剤を使用することで、6月中旬までの収穫物ではセルリー疫病の発生は認められなかったが、6月下旬以降の収穫物で疫病の発生が認められた」との意見が出された。

このことから、6月下旬以降の出荷作型ではユニフォーム粒剤の施用に加え、新規に登録されたピシロックフロアブルの散布が必要だと考えられた。

表1 ユニフォーム粒剤処理30日後（6月25日）調査

試験区	調査株数	程度別発病株数				発病株率 (%)	発病度	薬害
		無	A	B	C			
ユニフォーム粒剤	I	10	10	0	0	0	0	無
	II	10	10	0	0	0	0	無
	III	10	10	0	0	0	0	無
	平均	10	10	0	0	0	0.0	0.0
無処理	I	10	9	1	0	10	3.3	—
	II	10	10	0	0	0	0	—
	III	10	9	0	1	10	6.6	—
	平均	10	9.3	0.3	0.3	0	6.7	3.3

【程度別発病調査基準】

無 0 : 発病なし

少 1 (A) : 外葉の一部に黄化または腐敗がみられる

中 2 (B) : 外葉の病徴とともに芯葉の腐敗がみられ、生育が停滞

多 3 (C) : 株全体が黄化または枯死

発病度 = { (A + 2B + 3C) / 調査株数 × 3 } × 100

イ 散布労力の比較検討

① 調査方法

市販の散粒器3種類（表2、図5）および手散布について、作業時間および散布量を調査した。散粒器は栽植密度50 cm×38 cm、2条植えの50株分に対する作業時間を計測した。また、屋内にて各散粒器の50本分に対する粒剤散布量を調査した。手散布は屋内で栽植密度50 cm×38 cm、2条植えを模して500mL容量カップ40個を配置し、その中にペットボトル蓋を用いて粒剤を入れる作業時間を計測した。うち15カップを選んで、各カップの粒剤散布量を計測した。

表2 供試散粒器の特徴

品名	スポット式散粒機 スポットくん	手動プッシュ式粒剤散布器 散ぼKW5	楽々スポット散粒器
メーカー名	(株)神木製作所	(株)サンエー	J・K・Cアグロ
参考価格 (目安)	12,000円	28,000円	5,000円
容量	1.0kg	2.0L	1.2L
重量	1.12kg	1.3kg	0.36kg
特徴	<ul style="list-style-type: none"> ・筒先が外れやすい ・重い ・残量が少量になると散布量が一定にならない ・散布レバーを引いてから吐出まで時間差がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・粒剤がボトル下からこぼれる ・重い ・残量が少量になると散布量が一定にならない ・散布するためにマルチを押さえつけなければいけない ・吐出先から定植穴までの距離を考慮して散布しなければいけない 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽い ・散布量調整がやりにくい



スポットくん



散ぼKW5



楽々スポット散粒器

図5 供試した散粒器

② 結果および考察

手散布の場合、10aあたり（定植本数4,000本）の作業時間は計算上で約5時間25分かかる。一方で、散粒器を用いた場合には、いずれの散粒器でも手散布の5分の1以下の作業時間となり、10aあたり1時間程度で処理できると考えられた（表3）。また、散粒機は手散布と比べて、処理時に腰をかがめる必要がない点でも優れる。「散ぽKW5」はタンク内の粒剤が少量になると散布量にばらつきが生じた。他の2つの散粒器は散布量の細かな設定は難しかったが、手散布に比べ、散布誤差は小さかった。現地で導入されている「楽々スポット散粒器」は、3種類のなかで最も安価で、軽かった。しかし、散布操作レバーを放すタイミングによって散布量に差がでるため、適切な散布量になっているかを定期的を確認したり、散布作業者を固定する等の対策が必要だと考えられた。

表3 作業時間

試験区	10株あたり 作業時間（平均）	10a（4,000株）あたり 作業時間（推定）
スポットくん	8.2秒	約55分
散ぽKW5	9.5秒	約1時間3分
楽々スポット散粒器	8.7秒	約58分
手散布	48.7秒	約5時間25分

表4 1株あたり散布量（平均）

試験区	散布量(g)
スポットくん	2.3
散ぽKW5	1.0
楽々スポット散粒器	2.3
手散布	2.5

(2) 鉢上げ時または定植時の亜リン酸施用の効果（令和5年度）

セルリー疫病の発生に低減効果があるとされる亜リン酸について、施用する亜リン酸の種類と施用時期を検討するため試験を行った。あわせて、7戸から使用実態について聞き取りを行った。

① 調査方法

- ・調査時期 令和5年4月～11月
- ・調査場所 原村（標高1,100m）露地ほ場
- ・供試肥料 亜りん酸粒状1号：く溶性リン酸7.0%（内水溶性リン酸4.0%）、
亜りん酸粒状2号：水溶性リン酸10.0%

表5 試験区の概要

区名	鉢上げ培土へ混用 (2 g/株)	定植時株元へ施用 (2 g/株)
試験区 1	亜りん酸粒状 1号	亜りん酸粒状 2号
試験区 2	施用なし	亜りん酸粒状 2号
試験区 3	亜りん酸粒状 1号	施用なし
試験区 4	施用なし	亜りん酸粒状 1号
無処理区	施用なし	施用なし

- ・ 耕種概要 6月13日定植、7月30日芽かき、8月23日収穫開始
- ・ 調査株数 1区8㎡の3反復とし、各区30株(10株×3反復)を調査
- ・ 調査日 令和5年8月23日

② 結果および考察

試験区4が、発生株率および発病度が最も小さく、全重が最も重く、株のばらつきが小さかった。これは、亜りん酸粒状2号に比べて肥効が長い亜りん酸肥料粒状1号を定植時に株元処理したことで、本病の被害が軽減され生育が安定したためと考えられた。

また、非感染苗や汚染されていない培土を用いたため、鉢上げ培土への亜りん酸粒状1号の混用の有無による発病株率や発病度の差は判然としなかった。

表6 亜りん酸肥料の種類、処理の有無、処理時期の違いによる疫病発病株率、品質への影響

区名	亜りん酸肥料		調査株数	発病株率(%)	発病度	全重(g)	変動係数	調整重(g)	草丈(cm)
	鉢上げ時	定植時							
試験区1	1号	2号	30	13.3	26.7	1301.3	26.10	873.7	49.3
試験区2	×	2号	30	14.4	31.1	1187.6	32.40	815.2	48.5
試験区3	1号	×	30	11.1	23.3	1249.7	32.24	848.3	49.4
試験区4	×	1号	30	4.4	7.8	1425.0	15.29	987.7	51.5
無処理区	×	×	30	17.8	36.7	1193.5	30.99	807.8	50.3

表中の数値は3反復の平均。

変動係数:数字が大きいほどばらつきが大きいことを示す。

(3) 諏訪地域における緑肥「てまいらず」(オオムギ)のは種時期の検討
(令和6年度)

汚染土壌の流出対策に向けた緑肥作物の導入を進めるため、諏訪地域での緑肥作物の適応性等を検討した。

① 調査方法

- ・ 試験場所 長野県農業試験場原村試験地(標高1,017m)
- ・ は種量 5kg/10a
- ・ 施肥量 N:P:K=各7.0kg/10a

② 調査結果

「てまいらず」を5月9日および5月20日には種した場合、いずれも6月11日には被覆率が100%に達した。また、5月29日には種した場合でも、6月11日には被覆率が80%に達していた。土壌流出対策としては、梅雨時期までに緑肥による被覆が完了することが重要であるため、諏訪地域におけるは種晩限は5月末と考えられた。また、5月上旬には種した場合、早いものでは約1か月で倒伏が始まり、約60日で枯死した。5月末になると倒伏までの在ほ期間はやや伸びるものの、8月上旬には枯死した。

表7 調査結果

は種日	草丈 cm (被覆率%)				倒伏時期	枯死時期
	5月20日	5月29日	6月11日	6月27日		
5月9日	18cm (50%)	32cm (90%)	48cm (100%)	64cm (100%)	6月11日	7月12日
5月20日		21cm (60%)	33cm (100%)	55cm (100%)	6月26日	7月26日
5月29日			8cm (80%)	47cm (100%)	7月9日	8月5日
6月11日				20cm (60%)	8月6日	8月26日

③ 注意点

は種が遅れ、7～8月のは種になると暑さで生育不良となる。は種が10月以降だと越冬する可能性があり、越冬した場合、出穂後に種子が脱落し雑草化するため、出穂前にすき込む。

3 参考情報

(1) 「湿害対策手引書」の紹介

諏訪農業農村支援センターの重点課題として令和2～4年度に取組んだ成果を「湿害対策手引書」としてまとめている(図6)。湿害対策の基礎知識から、諏訪地域での取組み事例を掲載している。滞水対策の参考として、ぜひご覧ください。本手引書は弊所技術経営普及課「技術情報」のwebページからも確認できます(図7)。



図6 「湿害対策手引書(第4版)」
二次元コード
(PDF: 12.6MB)



図7 「技術経営普及課『技術情報』」
webページ

(2) 萎縮炭疽病の生理・生態および対策方法

① 概要

萎縮炭疽病は萎縮炭素病菌 (*Colletotrichum nymphaeae*) によって引き起こされ、芯葉のえそ斑点、萎縮および奇形を伴う症状が発生する。発病好適温度は 24~28℃であり、高湿度条件を好む。胞子はかん水により飛散が助長される。盛夏期定植の作型では特に発生しやすい。平成 18 年に初めて長野県内で確認された。



図8 セルリー萎縮炭疽病の症状

② 対策

本病は種子伝染するため、健全な種子の確保が不可欠である。種子の温湯消毒法は、種子を 50℃の温湯に 30 分間浸漬して実施する。水温管理を厳密に行い、処理終了後は直ちに冷水で冷却を行ったのち、保存せず速やかには種する。

発病した場合、被害残渣上で病原菌が越冬して翌年の伝染源になることを防ぐため、発病株や残渣は速やかにほ場外へ持ち出し、埋設による処分する。他には殺菌剤の予防的散布、敷きわらやポリマルチ等による土壌の跳ね上がり防止といった対策がある。

(3) 「H s 対策のための緑肥・輪作導入手引書」について

平成 29 年に国内で初めてテンサイシストセンチュウ（以下、H s）が原村で発見され、現在もその撲滅には至っていない。H s は人の活動に伴って拡大していると考えられ、発生したほ場では H s 防除のための緑肥の導入や輪作・休作等が推奨される。その内容を「H s 対策のための緑肥・輪作導入手引書」（諏訪農業農村支援センター、2026 年 3 月発行）としてまとめているので、特にブロッコリーへの転作を検討している方は、必ずご一読ください。



図9 「H s 対策のための緑肥・輪作導入手引書」
(PDF : 3, 517KB)

(4) セルリーかわら版 バックナンバー一覧

令和6～7年度に「セルリーかわら版」と題してセルリー疫病に関する情報発信を行ってきた(表8)。一部を抜粋して、図10のとおり掲載する。

表8 バックナンバー情報 一覧

Vol	発行日	主な内容
Vol.1	2024年4月4日	育苗期の疫病発生防止対策のポイント
Vol.2	2024年6月28日	梅雨期の病害および排水の対策方法
Vol.3	2024年9月17日	疫病対策実践事例の紹介
Vol.4	2025年2月26日	ユニフォーム粒剤の適用拡大について
Vol.5	2025年5月20日	育苗期の疫病発生防止対策のポイント
Vol.6	2025年7月9日	高温による疫病発生への注意喚起、緑肥による土壌流亡対策
Vol.7	2025年9月2日	高温による疫病発生への注意喚起、萎縮炭疽病の生態
Vol.8	2026年1月16日	疫病に関するアンケート結果、ピシロック707の適用拡大について



Vol.1
(PDF : 838KB)



Vol.3
(PDF : 814KB)



Vol.4
(PDF : 358KB)

図10 「セルリーかわら版」バックナンバー 二次元コード